様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：34417
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010 ～ 2013
課題番号：22520450
研究課題名（和文）高齢者が語るライフストーリーコーパスの作成と日独対照研究

研究課題名（英文）Textual Corpus Building and Contrastive Analysis of Life Stories of the Elderly in Japan and German-Speaking Countries

研究代表者
菅谷　泰行（SUGATANI YASUYUKI）
関西医科大学・医学部・准教授
研究者番号：00206393

研究成果の概要（和文）：
本研究課題は日本、ドイツ、オーストリア、スイスの主に介護付有料老人ホームに暮らす６５歳以上の高齢者を対象にして、人生に関するライフストーリーインタビュー調査を実施し、そのインタビューを記録した音声データを文字に起こし、ライフストーリーコーパスを作成した。また、このコーパス化の作業と併行して、ナラティブに関する文献研究、コーパス化したインタビューデータを用いた「語り」におけるフィラーの使用に関する分析、高齢者の心的特徴の比較、デマテル法のストーリー研究への適用の可能性について検討した。

研究成果の概要（英文）：
This study examines life story interviews that were conducted with elderly people over 65 years old living in communal retirement in Japan and German-speaking countries, those being Germany, Austria and Switzerland. The audio data of these interviews were transcribed into texts to build a textual corpus consisting of a structured set of elderly life stories. At the same time, a comparative study of differences in psychological characteristics of the elderly was undertaken using narrative approaches in the health care field together with analyzed ‘fillers’ (in the terminology of linguistics), which were based on this corpus of accumulated life stories. The possibility of applying ‘DEMATEL’ methodology to the analysis of the psychological nature of the elderly has also been investigated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2012 年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：ドイツ語学
科研費の分科・細目：人文学・言語学
キーワード：高齢者、ライフストーリー、老年言語学、ナラティブ、日独対照

１．研究開始当初の背景
本研究の背景には、話しことば、ナラティブ、資料体としての言語コーパスへの関心がある。

言語を話しことばと書き言葉に分けると、近代の歴史言語学は文字を媒体とする書き言葉の研究から始まった。しかし、１９８０年代から９０年代にかけて、日常場面での人間の自然な言語産出メカニズムやコミュニケーションにおける他者との相互行為への関心が強まり、文字言語にはない音声言語の特殊性や自然発話の現象に注目が集まるようになってきている。

ところで、話しことばを構成するジャンルには、朗読、講演、インタビュー、自由会話、多人数会話、電話など多様な種類があるが、ナラティブあるいはストーリーも、そのような話しことばのジャンルのひとつに数えられる。

このナラティブあるいはストーリーは「物語」と訳されることもあるが、本研究が対象としたのはフィクションや小説などの「書かれた物語」ではなく、話しことばとしての「語り」である。ナラティブとストーリーはほぼ同義に扱われることが多く、広義には「語る行為と語られたもの」[1)]を指す。したがって、バイオグラフィーのように人の誕生から晩年に至るまでのライフコースに関する長大な語りも、また普段の何気ない会話の中に挿入される「昨日の出来事」についての「些細なストーリー」[2)]も、同じようにナラティブのひとつとして論じられる。

この「語る行為と語られたもの」としてのナラティブあるいはストーリーの研究では、「意味づける行為」あるいは「経験の組織化」が重視される[3)]。たとえば、人生の語りであるライフストーリーでは、語り手がその語るという行為を通して自分の人生にどのような意味を与えようとしているのかが問われるのである。

さて、このようにナラティブあるいはストーリーを捉えるならば、ライフサイクルの最終段階にある高齢者のライフストーリーを聞き取ることで、その高齢者が自らの人生にどのような意味を与えようとしているのかを探る手がかりが求められるであろうし、また国を異にする高齢者のライフストーリーを比べることで、言語と民族の異同から生じる意味とストーリーの相違が確認されると想定されるのである。本研究課題はこの点において、日本とドイツ語圏に暮らす高齢者のライフストーリーの比較を企図したのである。

ただ、このときにひとつの大きな問題は資料体としてのコーパスの不在である。現在、冒頭に述べたように、話しことばへの関心から、話しことばを格納する各種の言語コーパスの構築が進められており、その中には高齢者の自発音声を収録する資料体もある。しかし、本課題が対象とするような高齢者のライフストーリーに焦点を当てた言語コーパスは日独において存在せず、この点で、研究基盤を整える意味でも、高齢者のライフストーリーを実装する言語コーパスの作成が喫緊の要件となっていたのである。

最後に、このコーパスの作成は「信用できる」(trustworthy) [4)] ストーリー研究を築く上でも、重要な意義を持つ。ナラティブあるいはストーリー研究は「個人の語り」から「意味」を抽出し、その「解釈」を通して、見えない「内面」を明らかにしようとする試みである。しかし、このように個人の経験や文脈に依存したデータの生成と分析は研究そのものの科学的な妥当性を危うくする恐れもある。この難題を克服する方策として、ひとつには研究と分析のプロセスが見渡せ、かつ検証可能な方法論を組み立てることが求められるが、もうひとつは、採取するサンプル数を増やし、分析プロセスに量的な評価を加えることが有益な手立てになると考えられる。この意味で、資料体としてのコーパスを作成する意義は大きいのである。

参考文献

(1) やまだようこ編、質的心理学の方法、新曜社、2007 年.
(2) M. Bamberg & A. Georgakopoulou, Small Stories as a New Perspective in Narrative and Identity Analysis, Text & Talk, 28(3), 2008, 377-396.
(3) J. ブルーナー著、岡本夏木、仲渡一美、吉村啓子訳、意味の復権：フォークサイコロジーに向けて、ミネルヴァ書房、1999 年.
(4) Y. S. Lincoln & E. G. Guba, But is it rigorous? Trustworthiness and authenticity in naturalistic evaluation, D. D. Williams (Ed.), Naturalistic evaluation: New Directions in Program Evaluation, No. 30, San Francisco: Jossey-Bass, 1986, 73-84.

２．研究の目的

本研究は、以下の３つの事柄を目的として作業を進めた。

(1) 日本とドイツ語圏において、高齢者を対象にライフストーリーインタビュー調査を実施し、そのインタビュー記録から高齢者のライフストーリーコーパスを構築すること。
(2) ナラティブに関する文献調査（文献サーベイ）を行い、ナラティブ研究についての展望を得ること。
(3) ナラティブ分析の方法論について検討し、「語り」の意味解釈法に数理的・計量的方法を導入し、「確実性」(dependability) の高いストーリー分

析法を案出し、日独の高齢者の「語りの構造」（＝「物語られた自己」）について考察すること。

３．研究の方法

上記の目的に対して、以下の方法を用いて研究を行った。

(1) 日本とドイツ語圏の高齢者を対象にライフストーリーインタビュー調査を実施する。インタビューは自記式の質問紙票と開放型の自由発話法を併用する。質問紙票はインタビューイにインタビューの焦点を直接的、間接的に告知し、語りの質を高める作用がある。これに対して、開放型の自由発話法は生き生きとした自発的な経験の語りを引き出す効果を持つ。インタビュー時間はインタビュー効果を配慮し、２時間を上限に設定する。録音は２種類のＩＣレコーダーを用いて、ＰＣＭと予備用としてＭＰ３の２形式で記録する。この記録した音声データを基にコーパスの作成を行う。

(2) 図書検索等を利用し、ナラティブに関する文献調査を行うとともに、重要な基本文献のテクスト研究を行う。

(3) 数理的モデルとしてのデマテル法（DEMATEL Method）をナラティブ分析に応用し、作成した言語コーパスの分析と意味解釈を行う。

４．研究成果

(1) 日本とドイツ語圏の主に介護付有料老人ホームに暮らす６５歳以上の高齢者を対象にライフストーリーインタビュー調査を実施した。日本におけるインタビュー調査地の都道府県別の内訳は、大阪府、兵庫県、京都府、静岡県、神奈川県、愛媛県、千葉県であり、ドイツ語圏はドイツ、オーストリア、スイスの３国でライフストーリー調査を実施した。インタビューに協力頂いたインタビューイの総数は日本が９７人、ドイツ語圏がドイツ１８人、オーストリア１６人、スイス１１人で、計４５人であった。また記録したインタビューの総時間数は日本が１７６時間５２分０１秒、ドイツ語圏が３２時間０４分２３秒であった。この採取した音声記録をワード形式でＰＣに文字入力し、この入力を完了した第１次転記データについて、点検とトランスクリプション化を行い、テクストコーパスを作成した。つぎにこの完成したワードによるテクストコーパスをエクセルデータに変換し、タイムライン上に発話情報としての時間表示等を加え、テクストコーパスと音声コーパスとの連携が取れるように配慮した。

(2) ナラティブに関する文献調査については、特に医療福祉分野における文献を中心にして先行研究の調査を行った。つぎにこの文献研究の結果を踏まえ、ナラティブの医学教育方面での実践的な活用法を検討し、多職種連携や地域医療連携を基盤とする統合的な医療コミュニケーション教育の在り方について提案した。

(3) 分析プロセスの記述を明示し、「確実性」の高いナラティブ分析を実現するために、デマテル法を用いた分析法の開発を試みた。その際、本研究課題のライフストーリーコーパスが作成途上であったため、グループインタビュー形式で作成した「病棟看護師の譫妄についての語り」を用いて、方法論的な可能性を検討した。分析手法としては、病棟看護師の自然発話を「譫妄の原因」と「譫妄様患者の行動」の２群に分け、それぞれの発話内容を構成する要素間関係から中心的因子を抽出し、その分析結果を基に病棟看護師が譫妄及び譫妄様患者に対してどのような意識構造を持っているかを調査した。分析の結果、「②性格」「⑨チューブ類の挿入」「⑬安静治療上の体動制限」「⑯睡眠」「⑱会話コミュニケーション」の各要因が「⑳譫妄発症のしやすさ」として意識されていること、また「譫妄様患者の行動」については、特に「②幻視・幻覚」「③見当識障害」「⑥思考混乱」の要因が強く意識されていることが明らかになった。この分析のフロー図及び上述の「譫妄の原因」と「譫妄様患者の行動」の意識構造を構成する要素間の関係とこの関係の強度は以下のように図示される。

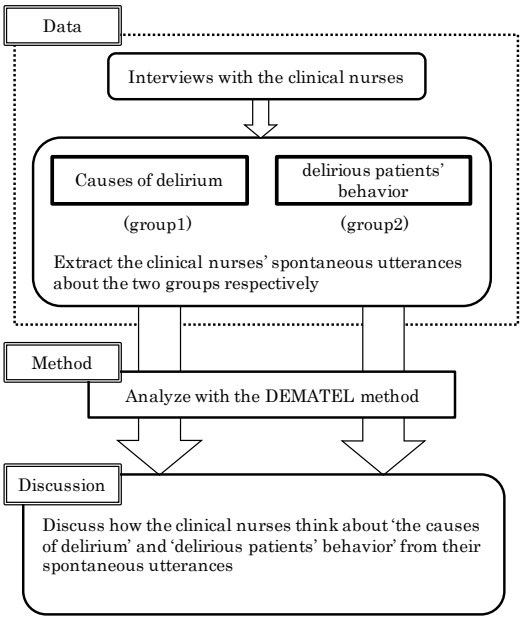

Figure 1. The flow of analysis

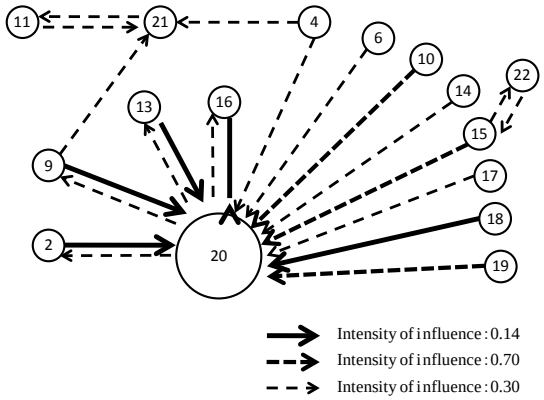

Figure 2. The structured graph of the group 1 “causes of delirium”

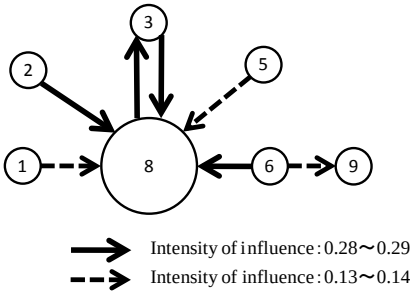

Figure 3. The structured graph of the group 2 “delirious patients’ behavior”

上記の図２と図３が視覚的に明示しているように、ＤＥＭＡＴＥＬ法の大きな長所は、構造を成す構成要素のひとつ一つに意味を持たせ、かつその要素間の関係性に作用の強度を加えて、それを明快な有向グラフによって表示できる点にある。したがって、この特性を活かすことで、「物語られた自己」（＝高齢者のこころ）を構成する諸要素間の複雑に絡み合った影響関係を簡明な構造図として表示し、また比較することが可能となるのである。本研究はこれまでに半構造化形式の質問紙票の統計分析、また高齢者のライフストーリーコーパスの一部を使ったテキストマイニング（Text Mining）によるフィラー（filler）の形態素解析を行ってきた。今後はこの統計的分析法と計量的分析法に、このデマテル法による構造分析法を加え、統合的で「確実性」をもつ分析モデルを完成させ、それを日独の高齢者のライフストーリーコーパスの対照研究に適用することで、本研究の更なる発展と作成したコーパスの活用に繋げたいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 菅谷泰行、川浦孝之、高齢者の心的特徴に関するアンケート調査結果と居住形態からみた若干の考察、関西医科大学教養部紀要、査読有、第 33 巻、2013、103-127 ページ.

② Yasuyuki Sugatani, Current Situation and Issues of Medical Education in Japan, Health Communication, 査読有, Vol. 7, No. 2, 2012, 72-77. http://www.healthcommunication.or.kr/main/data/file/journal/1346331630_42be4df3_C0C7B7E1C4BFB9C2B4CFC4C9C0CCBCC7-7B1C72C8A3+72-77.pdf

③ 菅谷泰行、川浦孝之、フィラーと高齢者の段階的年齢区分、関西医科大学教養部紀要、査読有、第 31 巻、2011、71-96 ページ.

〔学会発表〕（計 2 件）

① Takayuki Kawaura, Yasuyuki Sugatani, Clinical Nurses’ Awareness Structure of Delirium, An Analysis of Spontaneous Utterances in a Group Interview by DEMATEL Method, The 6th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems and The 13th International Symposium on Advanced Intelligent Systems (SCIS-ISIS 2012), 2012/11/24, Kobe Convention Center (Kobe, Japan).

② Yasuyuki Sugatani, Current Situation and Issues of Medical Education in Japan, The 2nd Seoul International Conference on Communication in Healthcare, 2012/09/15, Seoul National University(Seoul, Korea).

６．研究組織

(1)研究代表者

菅谷　泰行（SUGATANI YASUYUKI）

関西医科大学・医学部・准教授

研究者番号：00206393

(2)研究分担者　無

(3)研究協力者

川浦　孝之（KAWAURA TAKAYUKI）

関西医科大学・医学部・助教

研究者番号：90434828